

一

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

自分の居場所はどこにあるのか

◎ 解答は解答题用紙に書くこと。(氏名は書かないこと)
字数制限のあるものは、句読点などの記号も字数に含む。

高校、大学(さらに大学院生)といった学生時代、私はある一つの観念に囚われていた気がする。それはひと言でいうと、「この世界で、ほんとうに自分を活かせる場所が見つけれらるだろうか」という思いだ。別な言葉で言い換えれば、「あるがままのほんとうの私」を全面的に受け入れてくれるような「ほんとうの社会」はあるのだろうかという思いでもある。さらに私一人だけではなく、多くの人びとにとってそれぞれの「ほんとうの私」を全面的に認める社会がよい社会で、社会とは本来そうあるべきだという思いを強くもっていたように思う。

そのような考えからすると、自分が生きている現実(つまりは「日本の社会」として表象されるそれ)は、とてもそうした理想からはほど遠くぜんぜんダメな社会としてしかイメージできなかった。

(A) ^①「こう」した思いに囚われつづけていると、だんだん生きているのが苦しくなる。だから若いころ、「こう」した理想からの現実批判の思いに囚われたとしても、多くの人びとは就職して社会人になっていくなかで、「世の中、そんな理想は通用しない。社会とはそこそこ生きるに値する場だ」というかたちで、多かれ少なかれ、現実の社会生活のなかにソフト・ランディングしていくのだろう。しかし、幸か不幸か三〇歳近くまで大学に残っていた私は、右で述べたような反社会的感情をかなりの純度で観念的に保持したまま生活していたように思う。

しかし、うまくいい表わせないが、二〇代の後半に「考える」という行為も「生活」そのものも「つちもさつちもいかなくなった時期に、自分自身で自分の「生」を息苦しくしているような気がしてきて、そうした自分の「生」を損なっている大きな要因が、実はこうした反社会的観念にあるのではないか」という思いが自分のなかに生じた。しかしそのころは、またそれをうまく解きほぐす思考方法が見つけ出せずにいた。

そんな私に発想の転回をもたらしてくれたのはやはりジンメルだった。とくにこの章で中心的に取り上げる「社会はいかにして可能であるか」という小論は、「ほんとうの私」あるいは「ほんとうの社会」という観念に囚われていた私の頭を解きほぐしてくれた。以下、その内容について論じてみたい。

自分をほんとうにわかってくれる人はいるか

さて、「自分探し」という言葉がある。この言葉は肯定的にもまた批判的にも理解されているようだ。肯定的にという意味は、「いまの自分に満足しないでもっと自分を高めよう」という態度が、人生に対する積極的な姿勢として評価されるという点で。批判的にというのは、ほんとうの自分探しに「こだわりすぎる」ことによって、常にいまの自分を否定的にしかとらえられなくなり、「生」を損なってしまう危険を伴う場合があるからだ。自分探しの心性の一つの典型を、(B) 次のようにいうことができるだろう。

《いまの自分はほんとうの自分ではない。ほんとうの自分の「生」はもっと輝き充実しているはずだ。そうしたほんとうの自分に出会えなければ、せっかくのこの私の人生がなんとなくむなしく感じられてしまう。(C) 「いま・ここ」の自分を取り巻いている環境や自分を縛っている考え方のスタイルを一度全部チャラにして全く新しい自分、だれとも違う個性的な私そのものを探し直すことはできないだろうか。》

このような考え方に多かれ少なかれ囚われたことはいないだろうか(ちなみに私の場合は「こうした考えに囚われたことは、一度や二度のことではないような気がする」)。自分探しとは「ほんとうの私」を求めるゲームであるにとりあえずいえるだろう。私たちは、ほかのだれとも違うユニークな個性や主体性を発揮しなければ、生きるに値しない人生だといった価値観をいつのまにか受け入れがちだ。しかし、一方で私たちはほかの人間とは全く違う個性を發揮することなどできないということもうすうす知っている。^⑤「ほんとうの私」探しはいわば、「上がりのないすごろくゲームのような性質を帯びがちだ。私たちが生きているこの現実の内側で、このゲームが「上がり」に到達することは決してない。

だとしたら「自分探し」とはしよせんムダなことであり、「ほんとうの私」とはしよせん求めてもしょうがない見果てぬ夢なのだろうか? いや、私は必ずしもそうは思わない。「自分探し」は『「ほんとうの私」というゴールがどこかに実体的にあるはずだ』と理解される限りでは、それはかえって自分を息苦しくする袋小路に人を追いやる危険があるかもしれない。しかし(「いま・ここ」の私を越え出て、もっと違う私を求めたいという欲求それ自体は、「生きる」意味を求める「存在としての人間の(ある意味では)とても本質的な側面を指し示していると考えられる。しかもこの問題がやっかいなのは、ほかの人間との関係性という項を入れて考えなければ、どうしてもよく解けない問題だということにある。

というのは、「自分探し」には多くの場合は、「ほんとうの私」をほんとうにわかってくれる他者を求めることが同時に生じることが多いからだ。したがって「ほんとうの自分」探しと「ほんとうの自分」をわかってくれる他者探しとは (I) 「一体なのである。しかし、いったい「ほんとうの私」とはどのよ

受験番号

うに理解したらよいのだろうか？ また自分のことをほんとうにわかってくれる他者との関係とはどのようなもののだろうか？ そもそも「ほんとうの私」、ほんとうに自分をわかってくれる他者とは果たして存在するのであるか？——この問題をめぐる疑問はなかなか底をつかない。

「ほんとうの私」をどのように理解すればよいか

この章では、「ほんとうの私」という感覚と、人間が社会を為して生きているという現実的なあり方をどうつなげて考えたらよいのかということについてジンメルを考えをたたき台にしながら検討してみよう。主な素材は『社会学』の第一章の補論「社会はいかにして可能であるか」という小論だ。

「社会はいかにして可能であるか」という言い回しはちよつと奇妙な問いのように思える。これはジンメル自身もいつているように、カントが立てた「自然はいかにして可能であるか」という問いを「社会」に適用させたものだ。しかしここではカントの哲学との関係については深入りしない。「社会はいかにして可能であるか」というこの奇妙な言い回しにおいて、ジンメル自身が解きたかった課題についてちよつとこだわって考えてみたい。

一見するとこの問いは、組織や集合体としての社会の構造の生成や存立を問題にする問いのようにも見える。しかし、この問いは⑥「ほんとうの私」で立てられた問いではない。この問いの関心は、人がほかの人と関係をもつときの最低限の「条件」とは何かというものである。もちろんそのことは結果として全体社会の問題にもつながっていくのだが、少なくとも基本的には人がほかの人と関係を持つことが可能な条件への問いなのである。だからここで「社会」という語でいい表わされているものは、まず第一に Ⅱ（と） Ⅲ（と）の関係そのものである。

この問いはまずなによりも、人が「見知らぬ他者」と出会ったとき、なんとかその他者と関係を形成していくことができるためには、どのような基礎的条件が前提になるのかということを見ていくというかたちで発せられている。これは、ちよつとみると「何でそんなこと考えなきゃならないの？」といったくなるような問題にも思えるが、実はナカナカ面白い問いなのだ。

（菅野 仁『ジンメル・つながりの哲学』より）

*ジンメル…ドイツの哲学者、社会学者。

問一、（ A ）（ C ）に当てはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ つまり エ しかも オ だから

問二、傍線部①「こうした思い」とはどのような思いか、本文中から七字で抜き出さなさい。

問三、傍線部②「にちもさつちもいかなかった」とあるが、「にちもさつちもいかない」の類語として当てはまらないものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 袋小路 イ 前門の虎後門の狼 ウ 行き詰る エ 四面楚歌

問四、傍線部③「いまの自分に満足しないでもっと自分を高めようという態度」と同じ意味を表す別の表現を本文中から抜き出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

ア 対極的 イ 消極的 ウ 受動的 エ 能動的

問五、傍線部④「積極的」の反対語を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

問六、傍線部⑤『ほんとうの私』探しはいわば、上がりのないすぐろくゲームのような性質を帯びがちだ」とあるが、その理由として当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 「ほんとうの私」を見つけることは、自分の「生」を損ねることにつながるためゴールは設定されていないから。
イ 「ほんとうの私」に出会えなければ人生がむなく感じられてしまうというのは単なる思い込みにすぎないから。
ウ 「ほんとうの私」をどれほど求めたとしても、ほかのだれとも違う個性や主体性を発揮することはできないから。
エ 「ほんとうの私」は実体がなく存在していないので、どれだけ時間をかけて探しても見つかるものではないから。

問七、（ Ⅰ ）に入る言葉を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 表裏 イ 渾然 ウ 三位 エ 名実

問八、傍線部⑥「そういうレベル」とはどのようなレベルか、本文中の言葉を用いて三十字程度で答えなさい。

問九、（ Ⅱ ）（ と ） Ⅲ（ ）に入る語の組み合わせとして正しいものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 社会・社会 イ 人間・人間 ウ 人間・社会 エ 人間・条件

問十、本文の内容に合致するものには○を、合致しないものには×を答えなさい。

ア 自分の「生」を損なう要因の一つは、「ほんとうの私」あるいは「ほんとうの社会」という觀念に囚われることである。
イ 「自分探し」という言葉は、いい意味でも悪い意味でも使われているが、どちらかというとき否定的な意味合いが強い。
ウ 「ほんとうの自分」を見つけるためには、「ほんとうの自分」をわかってくれる他者を探すことから始めなければならない。
エ 人間が社会を為して生きていくということは、社会の構造を理解したうえで他者との関わりを考えていくことである。

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

①「合わなかったんだよ、考え方が」

考え方って、と、何か言いたげな理香りかさんに気にも留めず、誰かに言い訳をするように隆良たかよしは続けた。

「俺はもつと企画に関してじっくり考えたいから、公演の時期をずらそうって提案したんだよ。でも向こうがそれは無理だって。公演は毎月必ず行うからって言うって、最後まで聞かなかった」

瑞月みづきさんが、ペットボトルに残っていたジンジャーエールを飲みきった。

それはまるで、隆良の渴いた喉に水分を与えないようにしているようにも見えた。

「……俺は絶対にもつと考えた方がいいと思った。だって正直、公演の内容もそこまで面白いものになってなかったし。もつと考えて、煮詰めて、最高のものをお客さんに提供すべきだって俺は思っただよね」

誰も質問を追加してはいないのに、隆良はひとりで話し続ける。

「だけど向こうは、それじゃダメだって。どうしても譲らないわけ。おかしいなと思って、周りの演劇ファンに評判を聞いてみたら、あの劇団って、今までもそうだったんだってな。質の低いものを量産してて、結構叩かれてるんだって。数撃ちや当たると思ってるとか、テーマが似てきてるとか、結局は学生劇団の枠から出られてない、とか」

(中略)

「そうやって考えたら、会社に入るとかってホント、俺には向いてないんだなって思っわ」
就活なんてしなくて正解、と、言うと、隆良は後ろの壁にもたれた。今日も部屋着に見えない部屋着を身に付けている。

「どうしてそう思うの？」

ひゅんつとボールでも投げるみたいに、どこからか声が飛んできた。

瑞月さんが、隆良のことをまっすぐ見つめている。

「だって会社って、考え方が合うわけでもない人たちと同じ方を向いて仕事しなくちゃいけないんだろ？」
煙草たばこが欲しくてたまらないのだろう、隆良はひとさし指で床の上をとんとん叩いている。

「その方向っていうのも、会社が決めた大きな大きな目標なわけで。納得せずに、自分を殺して、毎日毎日朝から晩まで働くって、そんなの何の意味があるんだよって俺は思う。自己実現が人間にとって一番大切だって、どこかの哲学者も言ってただろ」

ジコジツゲン、と光太郎が子どものように繰り返す。

「今回のことだって、無理やり向こうのペースに合わせてコラボ展やったって、作品③の価値が落ちるだけだろ。俺、それは違うと思うんだよ」
隆良はすうと息を吸う。

「十点、二十点のものをお客さんに見てもらうなんて、そんな失礼なこと俺はできないから」

隆良の話がひと段落すると、部屋の中が静かになった。光太郎が、スーパーの白いビニール袋の中に空いたビールの缶を入れる。いつもみたいに、空き缶をくしゃつと潰つぶすことはしなかった。

「ちよつと、煙草買ってくる」

隆良が腰を浮かす。このままこの話が終われば、隆良が正しいことになる。そうするわけにはいかない。

「あつち」

「ねえ」

すぐ隣から、俺の決意④を押しつけるような声が出た。

「隆良くんその考え方は、たくさんたくさん考え抜いたうえで生まれたものなんだよね？」

瑞月さんだ。

「そうだったら、いい。けどもし、そうじゃないんだったら聞いてほしい」

「瑞月？」理香さんが不安そうな声を漏らす。

「私ね、わかったことがあるの」

瑞月さんは、理香さんの呼びかけを全く気にしない。

「最近思っったの。⑤人生が線路のようなものだとしたら、自分と全く同じ高さで、同じ角度で、その線路を見つけてくれる人はもういないだって」
瑞月さんはまっすぐに隆良を見つめている。

「生きていくことって、きつと、自分の線路を一緒に見てくれる人数が変わっていくことだと思っの」

隆良は立ち上がりかけた自分の体をどうしていいかわからないらしく、中途半端な姿勢のままそこにいる。^⑥

「今までは一緒に暮らす家族がいて、同じ学校に進む友達がいて、学校には先生がいて、常に、自分以外に、自分の人生を一緒に考えてくれる人がいた。学校を卒業するって言っても、家族や先生がその先の進路を一緒に考えてくれた。いつだって、自分と全く同じ高さ、角度で、この先の人生の線路を見えてくれる人がいたよね」

まるで説得をするような瑞月さんの声は、誰も話さなくなった部屋の中を満たしていく。

「これからは、自分を育ててくれた家族を出て、自分で新しい家族を築いていく。そうすれば、一生を共にする人ができて、子どもができて、また、自分の線路を一緒に見えてくれる人が現れる」

体が、左右に、上下に、小さく揺れているような感覚に襲われる。

「そういうことだと思うんだ。自分以外の人と一緒に見えてきた自分の線路を、自分ひとりで見つめるようになって、やがてまた誰かと一緒に見つめる日が来る。そしてそのころには、その大切な誰かの線路を一緒に見つめてるんだよね」

各駅停車の電車の中で、瑞月さんと、隣同士で座った。あの帰り道のことが、思い出される。

「だから今までは、結果よりも過程が大事とか、そういうことを言われてきてたんだと思う。それは、ずっと自分の線路を見えてくれる人がすぐそばにいたから。そりゃあ大人は、結果は残念だったけど過程がよかったからそれでいいんだよって、子どもに対して言っておげたくなるよね。ずっとその過程を一緒に見えてきたんだから。だけど」

瑞月さんは言った。

「もうね、^⑦そう言ってくれる人はいないんだよ」

——私ね、ちゃんと就職しないとダメなんだ。

「私たちはもう、たったひとり、自分だけで、自分の人生を見つめなきゃいけない。一緒に線路の先を見えてくれる人はもう、いなくなったんだよ。進路を考えてくれる学校の先生だっていないし、私たちはもう、私たちを産んでくれたときの両親に近い年齢になってる。もう、育ててもらっなんていう考え方は無理ない」

——私のお母さん、ちょっと弱いんだよね。体っていうよりも、心が。

⑧「私たちはもう、そういう場所まで来た」

電車の中で聞いた瑞月さんの声が、現実のそれとコウ差^aする。

「ギンジくんと企画の話がなくなった、っていうさっきの言い方ひとつでもそう。まるで自分とは全く関係のないところで話が消え失せたみたいな言い方したよね。何それ、そんなの、地球オン暖化^bで南極の氷がなくなった、っていうニュースと同じじゃない。自分は何もしてないけど、何かのゲン象^cがきっかけでなくなった、って、そう言いたいのか？ したこともないくせに、自分に会社勤めは合ってる、なんて、自分を何だと思ってるのか？ 会社勤めをしている世の中の人々全員よりも、自分のほうが感覚が鋭くて、繊細で、感受性が豊かで、こんな現代では生きていき辛^dいなんで、どうせそんなふうに思ってるんじゃないよ。」

隆良はその場から動かない。

「そんな言い方ひとつで自分を守ったって、そんなあなたのことをあなたと同じように見てる人なんてもういないんだよ。あなたが歩んでいる過程なんて誰も理解してくれないし、重んじてない、誰も追ってないんだよ、もう」

瑞月さんの言葉から滲み出る説得力^eが、この部屋にいる全員を、がんにがらめにしている。

「ただのバイトのくせに『仕事行ってくる』って言うてみたり、あなたの努力が足りなくて実現しなかった企画を『なくなった』って言うてみたり、本当はなりたくてなりたくて仕方がないはずなのに『周りからアーティストや編集者に向いているって言われてる』とか言うてみたり、そんな小さなひとつひとつの言い方で自分のプライドを守り続けてたって、そんな姿、誰も知らないの。誰も追っててくれないの」

誰も、と、言葉のリン^d郭^dをもう一度なぞるように、瑞月さんは繰り返した。

「隆良くんは、ずーっと、自分がいまやっていることの過程を、みんなに知ってもらおうとしているよね。そういうことをいつも言ってる。誰かと知り合った、

誰かの話を聞いた、こういうことを企画してる、いまこういう本を読んでる、こういうことを考察してる、周りは自分にこういうことを期待してる」

瑞月さんは息を吸う。

「十点でも二十点でもいいから、自分の中から出さなよ。自分の中から出さないと、点数さえつかないんだから。これから目指すことをきれいな言葉でアピールするんじゃないかって、これまでやってきたことをみんなに見てもらいなよ。自分とは違う場所を見る誰かの目線の先に、自分のものを置かなきゃ。何度

も言うよ。そうでもしないと、見てもらえないんだよ。私たちは。百点になるまで何かを煮詰めてそれを表現したって、あなたのことをあなたと同じように見ている人はもういないんだって」

瑞月さんはそこまで言うと、我に返ったように口を閉じた。

「うめん」

足元に置いてあったカバンを引つ掴んで、瑞月さんは部屋から飛び出した。それはとても速い動作で、誰も止めることができなかった。

隆良は、まだ、その場から動かない。理香さんは、顔の向きは変えずに、目だけで隆良のことを見ている。光太郎は何も言わないで、じゅうたんのの上に落ちている一口チーズの包み紙を弄もてあそんでいる。

「頭の中にあるうちは、いつだって、何だって、傑作なんだよな」

俺はそう言いながら立ち上がると、部屋のドアの方向へと歩いた。

「お前はずっと、その中から出られないんだよ」

それは、ギンジにぶつけた言葉と全く同じだった。いまこのときのための言葉だったんだ、と俺は思った。

(朝井 リョウ『何者』より)

問一、 傍線部 a～d のカタカナと同じ漢字を使う熟語を、それぞれア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---------|---------|--------|--------|--------|
| a 「コウ差」 | 「ア コウソク | イ コウスイ | ウ セイコウ | エ コウツウ |
| b 「オン暖」 | 「ア オンガク | イ キオン | ウ オンジン | エ オンビン |
| c 「ゲン象」 | 「ア キゲン | イ ゲンジツ | ウ ゲンゴ | エ ゲンイン |
| d 「リン郭」 | 「ア ネンリン | イ チクリン | ウ リンジ | エ リンジン |

問二、 傍線部①「合あわなかつたんだよ、考え方が」とあるが隆良の考え方とはどのようなものか、当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 企画を考えるうえで重要なのはテーマであり、それを決めるためにもコラボ展は必ず行うという考え方。
 イ 周囲からの評判が何よりも大事であり、そのためには公演を毎月行わなければならないという考え方。
 ウ 公演の内容は考えに考え熟考を重ねたうえで、完璧なものを表現しなければいけないという考え方。
 エ 人間にとって大事なものは自己実現であり、そのためには哲学者の思想を学ばねばならないという考え方。

問三、 傍線部②「会社に入るとかってホント、俺には向いてないんだなって思うわ」とあるが、そう考える理由を次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 会社とは自分の考えを曲げて、人に合わせて働くところだと考えており、自分を殺して働くことに意味を見いだせないから。
 イ 周囲の人々は自分にアーティストや編集者になることを望んでおり、それに応えることが自己実現につながると考えているから。
 ウ 自由な時間で自由な服を着て新しい働き方をする事でクリエイティブな仕事ができるのに、会社に入るとそれがかなわないから。
 エ 会社に入ると、結果よりも過程が求められ、完成度の低いものでも自分の中から答えを出すという風潮に耐えられないから。

問四、 傍線部③「の」と同じ用法で「の」が使われている文を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 母の作つくったカレーライスはおいしかった。
 イ あの日のことは今も心の中に残のこっている。
 ウ ところで、この本は彼女かののだろうか。
 エ 妹は、行くの行いかないのと騒さわいでいる。

問五、 傍線部④「決意」の熟語の構成を、A群のあくカの中から一つ選び記号で答えなさい。また、同じ構成の熟語を、B群のあくカの中から一つ選び記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|----|--------------------|--------------------------|------|------|------|------|
| A群 | ア 同じような意味の漢字を重ねたもの | イ 反対または対応の意味を表す漢字を重ねたもの | | | | |
| | ウ 上の字が下の字を修飾しているもの | エ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの | | | | |
| | オ 主語と述語の関係にあるもの | カ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの | | | | |
| B群 | ア 岩石 | イ 因果 | ウ 投球 | エ 国立 | オ 不安 | カ 遠路 |

問六、 傍線部⑤「人生が線路のようなものだとしたら」に使われている表現技法を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 倒置法
- イ 擬人法
- ウ 隠喩法
- エ 直喩法

問七、 傍線部⑥「中途半端な姿勢のままそこにいる」とあるが、この時の隆良の気持ちとして当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 愉快
- イ 嫌悪
- ウ 感動
- エ 困惑

問八、傍線部⑦「そう言ってくれる」とあるがどのようなことを言ってくれるのか、本文中から十字で抜き出さない。

問九、傍線部⑧「私たちはもう、そういう場所まで来た」とあるがどういうことか、当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 周囲の勧めでアーティストや編集者を目指すようになったということ。

イ 自分ひとりで自分の人生を考えていかなければならないということ。

ウ 自分たちを産んでくれた時の両親の年齢に近づいてきたということ。

エ 何がどうなったかよりも何をどうするかが大切になったということ。

問十、傍線部⑨「何かを煮詰めてそれを表現したって」とあるが、「煮詰める」という言葉のここでの使い方と同じものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 二人の意見の違いから会議が煮詰まってしまふ。 イ 彼は煮詰めたような表情でおもむろに歩き出した。

ウ 空の色が煮詰めたようになり星が見えなくなった。 エ 長い時間をかけて話し合い議論が煮詰まってきた。

問十一、「隆良」は自分をどのような人間だと思っていると、「瑞月」は考えているか、本文中から抜き出し始めと終わりの五字を答えなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一、次の各文の傍線部を、主語にふさわしい敬語に直すとき正しいものを、それぞれア～ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

① 私は先生にチケットをあげる。 【ア くださる イ 差し上げる ウ あげます 】

② 母が担任の先生に会う。 【ア お会いになる イ お目にかかる ウ お会いになれる 】

③ 私の作品を先生が見る。 【ア ご覧になる イ 拝見する ウ ご覧になれる 】

問二、次の各文が【 】内の意味になるように、空欄に入る動物を、後のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

① () 脚をあらわす 【 】 隠していたことがばれること

② () をかぶる 【 】 本性を隠しておとなしく振舞うこと

③ () も木から落ちる 【 】 どんな名人でも失敗することがあること

ア 犬 イ 馬 ウ 猿 エ 猫 オ 虎

問三、次のア～エの文を並び替えたとき、最後に来る文を記号で答えなさい。

ア それでも、私はその気持ちがうれしかった。 イ しかし、それは私の思っていたものではなかった。

ウ だから、その気持ちに私は感謝しようと思う。 エ 朝起きると枕元にプレゼントが置かれていた。

問四、次の文章から推測されるものとして正しいものを、後のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

球技大会の係を決めることになった。一人二つの係を持たなくてはならない中で、A君はバレーとサッカーを担当することになった。B君は一つはA君と同じだが、もう一つはA君の選んでいない野球を選んだ。C君は一つはA君と同じバレーを、もう一つはA君の選んでいないB君と同じものにした。D君はB君と同じサッカーとC君と同じ野球を選んだ。

ア B君はバレーと野球を選んでいる。

イ C君は両方ともA君と同じ競技を選んでいる。

ウ B君は両方ともD君と同じ競技を選んでいる。

エ A君とD君の共通する競技は野球である。